



# 月下美人の咲く図書館

翔流





誰も彼もが眠りについた町は、優しい静寂だけが支配していた。

月がおっぼり顔を出す丑三つ時、虫の演奏に耳を傾けながら、僕は待ち合わせている場所まで歩いてきた。涼しいそよ風は、風呂上がりの髪を乾かし、靡かせた。息を吸えば、夜の甘い香りが鼻を通る。一気に吸っても足りないくらい。

僕は歩きながら、眠りについた町を眺めていた。家もお店も街灯も、柔らかく息を吐きながら、眠りについていく。

普段起きて見ている世界との温度差に、僕は改めて面白い気分だった。

待ち合わせている場所。そこは夜のこの時間になると、より特別さを増す。昼間では見ることが出来ない光景を披露してくれる、そんな場所。

歩き続けて数十分すれば、待ち合わせの場所に到着する。その場所とは、この町にある公共の図書館のある場所。

「言の路図書館」は、僕が中学生の頃に創立された図書館。一階に子供用の絵本や文庫、二階には専門的な文庫や資料などを構えた、非常に大きくて豪華な造りになっている。さらに、視聴覚室や検索スペースなども備わっているというのだから驚きだ。

その図書館には、晴れの日限定で誰でも利用出来る「読み人テラス」と呼ばれる広場がある。ここでは借りた本や資料を読んだり、宿題をすることが出来るということを利用して利用する人が多い。

そう。待ち合わせの場所とは、この広場だ。

テラスを覗くと、そこに彼女はいた。灰色のセーラー服をまとい、おさげの黒髪に丸メガネ、足には長いブーツを履いている。そして、月明かりをスポットライトに、ベンチで一冊の厚い本を、黙読していた。

「来たよ、エル」

僕は彼女に届くくらいの声で呼んだ。彼女はこちらを向くと、静かに席を立ち、僕の方へと歩いて来た。

「来てくれたんだね。ありがとう」

彼女は右肩の三つ編みを撫でた。本には、葉が挟まっていた。

僕とエルはテラスに入り、それぞれ持ち寄った本を開いて読んでいた。エルはさつき読んでいた厚い小説を、僕は家から持ってきた短編小説を数冊読んだ。

「あ、新しいのがある」

「そう。中島敦の『山月記』だよ。学校で習ったから買ったんだ」

「後で読ませて？これももう少しで終わるから」

「いいよ」

エルは子供みたいに口角を上げた。

僕たちは黙々と読んでいた。夜の読書は目に悪いと思われるが、月が本当に煌々と輝いていたので、文字がライト並みに綺麗に見えた。エルはそんな月を「天然の照明」と呼んで拝んでいる。月明かり自体がかなり貴重なことに加え、今宵の明るさは滅多にない最高の機会だと言っていた。

「今宵の読書は捗りそう。それ貸して」

そう言ってエルは、さっきの小説を閉じて僕の山月記を借りた。

「相変わらずの速読だね」

「そう？この小説、今日を入れて三日使って読んだわ」

「その厚さで三日なら早いよ。英語のタイトルだけど、誰の小説？」

「メルヴィルの『白鯨』。世界の十大小説のひとつにもある名作なの」

「英語の小説かぁ。英語読めるの？」

「それなりにね。英語得意だったから。結構面白かったわ」

英語が得意なことは初耳だ。ひとつエルについて知ることが出来た。

エルは山月記の世界に浸かっていた。ページの一枚一枚をひとつづつ、丁寧に捲りながら。月の夜と  
いうこともあり、エルが虎になった主人公李徴の様に見えた。

その姿勢を見つめていた。膝元に照らされる白い月明かりが、ページに並ぶ活字を鮮明に照らしている。  
る。

「思い出したことがあるの」

「なに？」

「茶太郎がここに来た日のことを。覚えてるの。ちょうどこんな月光の夜だった」

「ああ、そう言えばそうだったね」

その話をキツカケに、僕たちは初めてお互いを知った日の記憶について確かめ合った。

半年前。

彼女との夜間読書会が始まったのは、今から遡ること半年前。その日は夜ではなく、陽が落ち始める頃だった。

当時の僕は学校から帰るついでにこの図書館に立ち寄り、本を返そうとしていた。そうして新しい本を借り、テラスで宿題を済まそうと思っていた時、彼女に出会った。

出会った時の彼女は、どこか表情が暗く、来ている服もセーラー服ではなく普通の白いTシャツに短パンというシンプルな格好だった。そしてベンチにもたれ、人形のような瞳で溜め息をついていた。

「変な子だな」と思っていた時、彼女の膝に置かれていたメガネが滑り落ちた。しかし彼女は、落ちた事にも気が付いていない。少し様子を見ていたが、やはり動きがない。本当に気づいてないらしい。

「あの、メガネ落ちましたよ？」

僕は近寄ってメガネを拾い、彼女の膝の上に置いた。

「…夕暮れ時って、悲しいと思わない？」

「え？」

拾ってもらったことの感謝かと思いきや、こんな質問が飛んできて僕は驚いた。

「えっ、どういう…:…?」

「朝の光景。夜が衣服を脱いで、白々とした素肌を見せる淡い光景は美しい。そして夜もいいわ。星空に月明かり、幻想的でいいと思わない？」

「まあ、はい」

「清少納言も、『春はあけぼの』『夏は夜』と、その情景の美しさを書いていた。でも、夕暮れは悲しい。中村雨江が書いた『夕焼け小焼け』や、外村繁の『日を愛しむ』などは綺麗だけど、実際の夕暮れはどこか悲しい、と思う」

ベンチでもたれる彼女の口から溢れ出すポエティックな台詞は、僕のセリフの出る幕を奪っていた。その様はまるで、一人の文学者からの言葉を聴いているようにも感じた。

「な、なるほどですね…」

「あなたは、朝と夜、どっちが好き？」

僕は答えに困った。朝にも夜にも、特別どっちが好きかなんて考えたことなかったから。

「夜、かな…?」

僕は少し考えた末にそう答えた。

「へえ。なぜ?」

彼女はそれまで半目だった目を見開いて訊ねた。

「朝か夜かで言えば夜かな。それまで、夜は季節関係なく同じ景色だと思ってた。でも最近、そうじゃないって気付いてさ。虫の演奏とか草木が揺れる音とか、それらの微妙な変化に気付いた時、とても面白かったな」

僕が話し終わると、彼女はパッと表情を明るくしていた。さっきまでの様子が嘘だったかのように、その目は僕に「感心した」目だった。

「あなた、面白いわ」

「え? そうかな?」

「私も夜が好きだからか、親近感を感じるわ。あなたとは仲良くなれそう」

そう言って、初めて出会った彼女は笑った。大人っぽい雰囲気から現れた子供のような笑顔は、少しドキツとした。

その日の真夜中、僕は妙に眠れずにいた。ベッドに座って、窓から射し込む月明かりを浴びていた。あの時の彼女が気になるのだろう。



僕はカーテンを開け、夜の舞台を眺めた。夜空には雲ひとつなく、欠片のない満月がひとつ、白い光を放っていた。

「綺麗だなあ……」

月は不思議だ。特別な力や誘いがある訳でもないのに、どこまで見ても飽きることがない。目を痛めることもない、優しさを光らせている。

何分か眺めていた時、窓に何かが当たる「カツン」という音が鳴った。

驚いた僕が恐る恐る見下ろすと、そこにはなんと夕暮れに図書館で会った彼女がいた。今度は格好が違い、灰色のセーラー服におさげの黒髪、丸いメガネをかけ、長いブーツを履いていた。

家の前で彼女は「おいで、遊ぼう」と言うように、口を開閉させていた。

僕は辺りを見渡し、家の人が全員寝ていることを確認し、そつと窓から外に出た。この部屋から地上への高さは一メートルもないので、玄関からサンダルを持ってきて降りた。

「どうしてここが分かったの？」

「たまたまここを通っただけ。散歩していたら、あなたが見えた」

「見えたって」

「まだ寝てないの？なら私と遊ぼう」

月明かりの下、彼女は僕に言った。

「遊ぶって？どこに？」

「いい所があるよ。おいで！」

そう言うと、僕の有無も聞かずに右手首を掴み、そのまま全速力で走り出した。

「あっ！ちょっと!？」

夜の静かな町の中を、魚が泳ぐように進んでいく。僕も引つ張られながら一緒に月夜の町を駆け抜けていた。たたたたた、という足音が重なり、横切る風が涼しい。どこへ行くのかという不安もありながら、少しこの瞬間は、楽しい。

足が止まった時、僕たちはある施設の前に来ていた。

「ここって、言の路図書館？」

「そう」

「でも、入れないし、入ったらまずいよ……」

僕が心配そうに言うと、彼女は言った。

「大丈夫。入るのは中じゃないから」

そう言って彼女はドアを開けずに、身体を右に向けて歩き出した。ついて行くと、そこには木で作られた広いテラスがあった。僕が宿題を済ませようとした時に、出会った場所。

「ここで何をするの？」

「一緒にお話したいなって。本を読みながら」

「え？本を？でも目が悪くなるよ」

「大丈夫。今は月が明るいから」

彼女はそう言うと、テラスの柵を掴むとぴよんと軽々飛び越えてみせた。

「さ、君も」

僕は不安だったが、同じように柵を掴んで飛び越えた。普段よく来る場所なのに、夜というだけで全く印象は違かった。

「ほらっ。おいで」

彼女はベンチに座り、その隣のスペースに手を置いて僕を誘った。

僕はどうしようもなく、誘いのままにベンチに座った。隣に座ると、女の子特有の甘い香りと、柔らかな体温が感じられた。

「ねえ君、名前は？」

彼女は月明かりを見上げながら名前を尋ねた。

「富士見です」

僕は名乗った。

「下の名前は？」

「え？茶太郎」

そう言うと、彼女はなぜ嬉しそうに頬を緩ませた。

「いい名前ね。富士見茶太郎。この町の人って感じがする」

「あなたは？」

「私はエル」

「エル？外国の方ですか？」

そう訊くと、エルは初めてくすくすと声を出して笑って、

「いいえ。ペンネームよ」と言った。

「ペンネームってことは、小説家か何か？」

「そっちでもないわ。ただ名乗ってるだけ。愛称って言う方が正しいわ」

エル曰く、名前の由来は、フランス語で「彼女は」を意味する単語の「elle」が由来だという。

「じゃあ、エルって呼べばいいかな？」

「うん。私は茶太郎って呼ぶわ。気に入っちゃったから」

自己紹介を終えると、エルは月夜を見上げながら、膝の上に二冊の本を置いた。そして、そのうちの  
一冊を僕に差し出した。

「はい。これ読もう」

「これって、小説？」

「そうよ」

エルが差し出した二冊の本は、文庫本サイズの短編小説だった。僕に渡されたのは太宰治の『走れメロス』で、エルは芥川龍之介の『羅生門』。

「読んだことある？」

「一応あるよ。国語の教科書でね」

「あつ、やっぱりそこでも読むんだね！」

それを聞いたエルは嬉しそうに言った。

「メロスが人質にとられた友人のために、暴君ディオニスと交わした約束を果たすために走る姿に惚れるのよね」

「そうだよね。太宰文学でもかなり光の強い作品だと思うな」

いつの間にか、お互いまるでいつもの友達との会話のような警戒のない調子に話していた。まだ出て一日も経っておらず、まだ明かしていないことも沢山あるのに、ここまでスムーズに話せたことに驚きを感じた。

それから僕とエルは、自分の愛読している読書の話や、最近見た景色の話、好きなこと嫌いなことなどを果てなく交換した。しかし、エルの本当の名前と生い立ちだけは、最後まで聞くことは出来なかつ

た。

「秘密にしたいの。あなたにだってあるでしょう？それに話さなきゃ仲良くなれない、なんてこともないと思うし」

と言って、自分の過去についてはのりくらしと受け流していた。

「そっか。でも僕は聞きたいな、エルの本当の名前」

「……そんなに？」

「やっぱり気になるしさ。エルって名前も僕は好きだけど、本当の名前でも呼びたいな」

僕のセリフに、エルは少々戸惑いのような表情を浮かべた。そして「ふうん」と、小さく首を縦に揺らした。

「いつかでいいから、聞かせて？エルの本名」

この僕の言葉に、エルは「いつかね」と言った。言いたくないわけではなさそうだが、明かされるのは遠くなりそうだと感じた。

この日の夜はそんな風に会話を重ねるだけで朝を迎えた。膝に置かれた本は、夜風と夜明けのぬるさを受けて独特の温度になっていた。

「そろそろ、僕は行かなきゃ」

「そのようね。また会いましょう」

こうして僕たちの交流は終わった。

帰る前に、僕はひとつ訊いた。

「次は、いつ会える？」

「また同じ時間にここに来てくれれば会えるわ。いつでも」

そう、微笑んでいた。朝日に包まれたその表情は、嬉しそうだった。

『『山月記』 ありがとう。面白かったわ』

エルは本を閉じ、僕に返した。指先の爪が清潔に整っているのが見える。

「そっか、よかったよ。僕ももうすぐ読み終わるよ」

「何を読んでいたの？」

「中原中也の詩『一つのメルヘン』だよ。夜の河原が舞台の幻想的な世界を表現していて好きなんだ」

「私も読んでみようかしら。まだ中原中也は読んだことなかったわ」

「ぜひ読んで欲しいな。オススメだよ」

月明かりは、今もなお黄金色を輝かせ、町を照らしていた。そんな空間にしていると、本当に夜は明けるのだろうかと思ってしまう。時間の流れが緩やかに、穏やかに遅くなる。

「あ、そうだ」

突然エルは言った。ベンチから立ち上がると、僕にも立ち上がってついて来るように催促した。

「え？何どうしたの？」

「これを、見て欲しかったの」

そう言ってエルは、柵の外の草原にぼつんと咲いている一輪の白い花を指さした。白い花卉が蓮の花のように広がり、どこかウエディングドレスみたいにも見える。そして、真夜中にたった一輪で咲いていることに、何か魅力に似た不気味さを感じた。

でも、そのどれよりも自分の本音である言葉があった。

「凄く、綺麗だね」

「でしょう。咲いてるなんて、凄く貴重な瞬間よ」

エルによると、この花は「ゲツカビジン」という花らしい。夜間にしか開花しない性質と、花卉が透けて美しい様子を女性に例えたことから名付けられた。花言葉には「ただ一度だけ会いたくて」「儂い美」

「艶やかな美人」などが挙げられている。

「でも、何でこんな所に？」

「私も分からない。私も存在は話でしか知らなかったから、実物を見るのは初めて」

「そうなんだ…。それにしても綺麗だなあ」

その姿は、花言葉通りに艶やかだった。白い光を反射した花卉は、幽霊のようにおぼろげな雰囲気



持っていた。

「川端康成の小説にも、『月下美人』というものがあったわね」

「あっ、そういえばそうだね。まだ読んだことないけど……」

月の光を受けるゲツカビジンを、僕とエルは眺めていた。あまりの美しさに、今が夜だということさえも、忘れてしまいそう。

「ねえ、茶太郎」

「ん？ どうしたの？」

「こうして見ていたらね、言いたくなかったんだ」

「何を？」

僕が訊くとエルは、深く深呼吸をした後、口を開いた。

「私はね、実は人間じゃないんだ」

「ん????」

衝撃のカミングアウトに、僕は思考が追いつかなく、まず困惑だった。

「人間じゃない、の?じゃあエルって……?」

そう言うとエルは、ポケットに入れていた丸メガネをかけた。

「私の本名は、シオリ。ここの本たちの魂と、このゲツカビジンの精霊とのハーフなんだ」

理解してあげようと努めたが、全く理解が追いつかなかった。「？」がぐるぐると頭の中を走り回り、落ち着きがなかった。

「ごめんね、急に言って。ゲツカビジンを見ていたら、言える気がしちゃって」

「どうして、隠していたの？」

僕は訊ねた。初めて聞けた新事実の前に、どうしても知りたかったことだった。

「人間の友達が欲しかったから。これまで何度か人間には会って話しはしていたけど、私が精霊だと知るや震えだして、一目散に逃げて行っちゃうの。だから無難に近づくには、人間のフリをするしか、なかったの」

全てを告白したエルは悲しそうな、申し訳なさそうな表情で俯いていた。しゅんとしてしまった顔は、陰に隠れても分かった。

「そうなんだ……。話してくれてありがとう」

「今まで黙ってて、ごめんなさい」

エルは俯きながら謝った。

話を全て聞いた僕は、いつからかどこか安心のような感情に気が付いた。

「僕は君が精霊でも何でも、怖いだなんて思ったことないよ」

「本当？人間じゃないのよ？私」

「人間じゃなくなたって、こうして意思疎通が出来るし、好きなこと嫌いなこと語ることが出来た。それならもう人間と同じじゃないか」

僕からの言葉にエルは、くすつと口を押えて笑った。

そしてただ一言「ありがとう」と言った。

やがて、遠くの方から陽が昇り始めた。ほの暗かった世界は拭われ、着替えを終えた太陽の舞台が回り始めた。

「そろそろ帰る時間ね」

「うん。今日も楽しかった」

僕は荷物をまとめて、その場を後にしようとした。だが、直前でエルが手首をきゅつと掴んだ。

「どうしたの？」

僕の声にエルは、小さく呟いた。

「今夜は久しぶりに、私が迎えに行ってもいい？初めて会った夜みたいに」

この言葉に僕は、元氣よく頷いてみせた。

誰も彼もが眠りについた町は、優しい静寂だけが支配していた。月がおっぼり顔を出す丑三つ時、虫の演奏に耳を傾けながら、僕は彼女が来るまで待っていた。

窓に小石が当たる「カツン」という音が鳴れば、それは迎えが来た合図。  
僕はひっそり、出かける支度をした。



げっかびじん さ としょかん  
月下美人の咲く図書館

2023年10月28日 発行

著者 しょうり  
翔流

町制施行60周年・かなみ知恵の和館10周年記念事業冊子

発行 函南町教育委員会

製本 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

419-0122 静岡県田方郡函南町上沢107番地の1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。

（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。

作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとし、主として公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関するものです。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。



---

誰も彼もが眠りにつ  
いた夜、僕は「言の路図書  
館」のテラスで「エル」  
と名乗る少女と夜間読書  
会をしている。ある夜、  
名前も生い立ちも話して  
くれないエルがうちあけ  
た秘密とは？

---

